共同研究　半七捕物帳（六）

序　浜田雄介
「川越次郎兵衛」小考　鈴木優作
「夜叉神堂」小考　大石徳子
「地蔵は踊る」小考　エンリコ・パオリーニ

序

浜田雄介

本誌第十九号より開始した共同研究の第六回である。大学院の演習を母胎に、現在の流布本である光文社文庫版『半七捕物帳』を第一巻から読み進めたものが、今回、第六巻に至った。最終巻ではあるが、扱わなかった作品も多々あり、大学院生や私の関心が途切れれば無理せず休みながら続けてきたものなので、特別な達成感があるわけではない。主に頑張ってきたのは大学院生諸君なので、教員に達成感がないのは当たり前ではあるのだろうか。ただ、読み手にとってはただ六冊の文庫本を読んだだけでも、作品の執筆現場に思いを馳せれば二十年かけて書かれた連作なのである。そのことに引き摺られるような感慨がないわけではない。その一端を、各論文を一覧しつつ記したい。

大石論文は「夜叉神堂」に描かれる出開帳や破戒僧の実態、鬼の面に関する物語的記憶について、諸文献を参照しつつ浮かび上がらせていった論考である。不勉強な私にとってそれぞれの考証は勉強になるものであったが、授業における大石の発表を聞きながら、勝手に連想していたのは江戸川乱歩の『黄金仮面』であった。「夜叉神堂」は雑誌『キング』に掲載された最初の半七もので、綺堂は「毎度断っているので、拠ろなく承諾」したという。乱歩もまた講談社の大衆的雑誌に書くことには当初大いに逡巡があり、殊に『黄金仮面』の『キング』連載時にはさまざまの工夫を行っていた。大石によれば「黄金」「仮面」は「夜叉神堂」においてもキーワードになっており、そこから考えれば出開帳の造り物は黄金仮面が狙う美術品の捕物帳的翻案ではないのか、とも思われる。半七捕物帳は乱歩登場以前すなわち日本における探偵小説確立に先行して始まり、影響も与えたはずのシリーズだが、昭和に入ってからは逆に同時代日本の探偵小説のドラマツルギーを取り込んでいったのではないか。などと、シリーズの変遷に感じ入ったのが、前段に触れた「感慨」である。

そのような作品の変遷の背後にある時代の推移を考えると、「地蔵は踊る」に探偵小説ジャンルと捕物帳ジャンルの交錯を見るパオリーニ論文はいっそう興味深い。本格探偵小説が消し去ってゆく神秘の要素を、「地蔵は踊る」は色濃く残し、探偵役の半七よりも、神秘の中心である地蔵こそが主人公であるかに読めるとパオリーニは言う。昭和十年十一月には江戸川乱歩の有名な探偵小説定義試案「探偵小説とは難解な秘密が多かれ少なかれ論理的に徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である。」（「探偵小説の範囲と種類」『ぷろふいる』）が提出され、翌昭和十一年には探偵小説のいわゆる本格／変格をめぐる甲賀三郎と木々高太郎の論争が、多くの作家を巻き込んで行われた。「地蔵は踊る」はその昭和十一年の作品なのである。侃々諤々の潮流の中で自らの立ち位置を探る綺堂の、旧世代ゆえの静かな思索を推測するのは、ロマンティシズムに過ぎようか。

鈴木論文が扱う「川越次郎兵衛」は、物語冒頭の不審人物の「天下を引き渡すべし」という言葉が、結局幕府瓦解の前触れであったと結ばれる物語である。明治に余生を送る半七の感慨で結ばれるのは「半七捕物帳」の常套だが、本作は旧幕末期の頽廃が組み込まれているだけに、転換期の異常性という趣が強い。狂を衒うかのような興味本位の犯罪には今日的な印象もあり、私自身は今年（二〇一八年）二月に京都百万遍交差点に炬燵を持ち出して鍋を食べたという京都大学大学院生の事件を連想した。今日的に見えて、しかし実際にはこの種の事件は目新しいことではなく、私自身の遠い青春も含めてどんな時代でも、若者は基本的に馬鹿者なのであろう。そんな愚かさも含めた佯狂の広がりを、鈴木は作品に重ねる。時代の変化と連続との両方を見据えるための装置が、半七という綺堂の発明であったかもしれない。

毎回記すことだが、各論考はそれぞれ扱った作品の謎解きや結末に触れている。『半七捕物帳』本文の引用については先に記した光文社文庫版『半七捕物帳（六）』を用い、各自で初出等の異同を確認した。また今井金吾校訂『定本武江年表』（ちくま学芸文庫、二〇〇三年一〇月～二〇〇四年二月）、今内孜『半七捕物帳事典』（国書刊行会、平成二二年一月）などは基本文献としてしばしば参照させていただいているが、今回はそれに浅子逸男編『編集復刻版半七捕物帳　初出版集成』（三人社）も加わった。

「川越次郎兵衛」小考

鈴木優作

基礎的情報

「川越次郎兵衛」は『講談倶楽部』一九三五年一二月号に発表された。[1]

梗概を以下に記す。

安政二（一八五五）年三月七日のことである。一人の男が江戸城本丸表玄関に現れ、「天下を拙者に引き渡すべし」と怒鳴った。捕らえた男の菅笠には武州川越次郎兵衛と書いてあった。役人は乱心者として男を川越藩の屋敷に引き取らせた。しかし、藩邸では男が所持する臍緒書に「宇都宮在、粂次郎」とあることから別人であるとし、八丁堀同心・坂部が引き取りに行った。その途中、男は姿を消してしまい、役人たちはこれを旋風にこじつけたが、男の噂は世間に広まってしまった。不首尾な同心は内密に半七に助力を要請する。

半七の聞き込みでは、外神田町内の番太郎・要作夫婦は川越の者で、女房のお霜には次郎兵衛という弟がいるという。次郎兵衛は江戸へ奉公に出て来たが、行方が知れない。要作とは折り合いが悪かったようだ。要作の家には年増女と一七、八の娘が訪ねて来ている。お霜を詮議すると、娘は同じ村の者で、お磯という。亀吉の聞き込みによると、お磯は家のために吉原に売られ、女衒のお葉、その夫の松五郎が関わっているという。

馬道の庄太に手助けを頼むと、増村という菓子屋の番頭・宗助が半七にお目に掛かりたいという。主人の民次郎はお葉に金の無心をされて困っているらしい。民次郎には遊び友達がいて、芸人を連れて吉原などを遊び歩いている。半七は自らの「当て推量」として、民次郎がお城の前で騒ぎを起こした奴に大金を出すとかいう遊びを言い出し、名乗り出た芸人が「気ちがい」のふりをしたのだろう、という推理を開陳する。

夫婦喧嘩のために大川に飛び込もうとするお霜を半七が助ける。お霜は江戸にいられなくなり大磯に身を隠そうとする次郎兵衛に路用を持たせていた。次郎兵衛は江戸へ出る際の船で懇意になったお葉の元に笠を置き忘れ悪用されてしまい、事件を知り大磯へ逃げたのである。お葉はいなくなった次郎兵衛を探しに来たのであり、お磯は吉原へ売られる前に逢いに来たのであった。

江戸城へ乗り込んだ「偽気違い」は芸名三八なる太鼓持の「野州宇都宮在、粂次郎」であった。この一件を知ったお葉が遊びを言い出した民次郎を脅していたのである。半七は増村と坂部双方の顔が立つよう片をつけ、一人の怪我人も出さずに済んだが、その年の安政の大地震で次郎兵衛、お葉、お磯は死に、増村の商売は寂れたようだった。

本論の要旨を述べておく。本論では〈佯狂〉概念を視座とし、事件の当事者が「乱心者」とされたという点、そしてその振る舞いが実は偽りの〈狂気〉であり遊びに端を発している点、さらにそうした遊びが江戸の崩壊を予期していたと半七が解釈する点に着目し、それらを〈危機回避〉としての佯狂、〈責任回避〉としての佯狂、〈遊び〉としての佯狂、〈風刺〉としての佯狂、という佯狂表象の諸相と照らし合わせることで、本作における〈狂気〉の偽装の役割が、佯狂表象を基底としていることを明らかにする。

〈危機回避〉としての佯狂

事件の発端は一人の乱心者の江戸城侵入である。

「ひとりの男が本丸の表玄関前に飄然と現われて、詰めている番の役人たちにむかって『今日じゅうに天下を拙者に引き渡すべし。渡さざるに於いては天下の大変出来いたすべしと、昨夜の夢に東照宮のお告げあり、拙者はそのお使にまいった』と、まじめな顔をして、大きい声で呶鳴った。」

今内孜『半七捕物帳事典』（国書刊行会、二〇一〇年一月）によると、この出来事は史実に基づいており、同氏は明田鉄男『近世事件史年表』（雄山閣出版、一九九三年一月）の「安政二年（一八五五）三月七日武州川越の百姓久米次郎なる狂人、江戸城本丸玄関前まで侵入『天下をオレに渡せ』と叫ぶ」との記述に言及している。

この記述に「狂人」とあるように、史実の上では久米次郎は真実の「狂人」とされている。しかし、本作では後に判明するように粂

次郎の乱心は偽りであり、テクストではあえて真の「狂人」から偽の「狂人」へと変換されている。事件の中心が乱心者の出現にあり、それが偽りであると判明する点を探偵小説プロットのいわば山場である事件の真相として配置していることから、テクストの焦点はその偽りの〈狂気〉＝〈佯狂〉にあると言える。

佯狂は中国において発生した概念であり、すでに『論語』「微子」において楚狂接輿に対しその用例がみられる[2]ように古代より一種の処世術として用いられ、日本では最古の漢詩集『懐風藻』に唐から帰国した留学僧・釈智蔵が学業優秀のあまり同輩からの危険を感じ「陽狂」（＝佯狂）したとあり[3]、その概念的な受容がみられる。そして佯狂は、八木章好によれば「有徳の者や志を抱く者が困難な状況において韜晦的な手段として用いる保身の所作」や「俗世を離れた高雅な境地を狂態によって示そうとする一種の文人精神」など、歴史上多様な文脈で用いられている[4]。

さて、そうした歴史上の多様な文脈と比較してみた時に、本作における佯狂はどのような状況でいかに作用しているのであろうか。

事件の発端は、ある男が江戸城本丸表玄関に現れ「天下を拙者に引き渡すべし」と怒鳴ったことに始まる。しかし、役人たちはこの男・粂次郎を捕らえて刑に処すことができない。

こんな人間が江戸城の玄関へ来て、天下を渡せなぞという以上、誰が考えても乱心者としか思われません。この時代でも、相手が気違いとなれば役人たちの扱いも違います。本気の者ならばすぐに取り押さえて縄をかけるのですが、気違いである上に、仮りにも東照宮のお使と名乗る者を、あまり手荒くすることも出来ない。

そもそも佯狂には危機を回避するという役割がある。『論語』「微子」には、殷王朝末期、紂王の暴政下にあってその地を離れた微子・佯狂して死を逃れ奴隷となった箕子・諫めたために殺された比干の三者について「微子之を去り、箕子之が奴と為り、比干諫めて死す[5]」と記されており、この記述は佯狂の事例としてしばしば参照される。また、『漢書』「蒯伍江息夫伝」においては謀反の勧誘に失敗し後難を恐れて佯狂した蒯通の伝がある[6]。矢嶋美都子は、この蒯通の例は〈狂〉は殺されないという観念が周知されていたことを示している、と指摘している[7]。

本作においては、粂次郎の佯狂はこうした危機回避としての佯狂が同時代の法制度を踏まえた上での刑罰の回避という形で現れている。半七老人は「昔はどうだったか知りませんが、幕末になっては相手が乱心者と判っていれば、余りむずかしい詮議もありませんでした」と振り返っている。

江戸幕府における刑法典『公事方御定書』の下巻『御定書百箇条』（寛保二（一七四二）年）を繰ると、「乱心者」の法的処遇として「第七八条　乱気にて人殺之事」には次のようにある。

一乱心にて人を殺候共可為下手人候然共乱心之証拠慥に有之上被殺候もの之主人並親類等下手人御免之願於申出ハ遂詮議可相伺事

一乱心にて其人より至て軽きものを致殺害候ハヽ不及下手人事[8]

これらの条文から、当時の「乱心者」は「今日の刑事法制の心神喪失に相当」し[9]、一般的な犯罪者と区別されて減刑の措置が取られる場合があったことが読み取れる。また、小田晋は「徳川幕閣の最高裁判所に相当する評定所の扱いの事件を、寺社奉行所で編纂した判例集」である『百箇条調書』を分析した結果「一般に、厳刑をもって知られ、殺人犯（下手人）の認定を下されたら」「まず死罪を免れない江戸時代でも、乱心の場合の犯罪については、おおむね、「親類預け」という寛大な処分が選択されている」ことから「徳川幕閣の裁判官たちは、人間が狂気・乱心におちいって犯罪をおかすことがあること、その際常人と同様の処分をすることの妥当でないことなどは、十分認識していたように思われる」としている[10]。従って、作中時代においては現実的状況として「乱心者」に対する処置が寛大であったことが理解される。こうした例外的状況を逆手に取って粂次郎は「田舎者に化けてお城へ乗り込み、いざというときには偽気違いで誤魔化す計略」によって、刑罰から逃れ犯行を成し遂げたのである。こうした粂次郎の佯狂の振る舞いは、〈危機回避〉という佯狂表象の一側面と重なるだろう。

〈責任回避〉のための佯狂

さて、役人側としては粂次郎がどうして御玄関先まで安々と通りぬけて来たかということが問題となる。すると処置に困った役人たちは「天狗」という口実を設け責任をうやむやにする。

そうなると、ここに大勢の怪我人ができる。それも宜しくないと云うので、かの次郎兵衛は天から落ちて来たという事になりました。いや、笑っちゃあいけない。昔の人はなかなか巧いことを考えたものです。つまり彼の次郎兵衛は天狗に攫われて、川越から江戸まで宙を飛んで来て、お城のなかへ落とされたと云うわけです。こうなれば、誰にも落ち度は無い。

また、その後、八丁堀同心坂部治助らが粂次郎を引き取ることになるが、道中で粂次郎が逃げ出した際には「旋風」という言い訳が持ち出される。

俄かに旋風がどっと吹いて来て、あたりは真っ暗、そのあいだに次郎兵衛（粂次郎・論者注）のすがたが見えなくなってしまったと云うのです。これも前の天狗から思い付いたことで、恐らく油断をして縄抜けをされたのでしょう。縄抜けでは自分たちの落ち度になるから、これも旋風にこじつけたものと察せられます。

小松和彦監修『日本怪異妖怪大事典』によれば、天狗による神隠しの怪異は江戸時代の随筆類の中にしばしば表われており、最も有名な話として江戸下谷の少年・寅吉が七歳の時に天狗に連れられて仙境を訪れて以来、江戸と往来しながら神仙の修行を積んだとする国学者・平田篤胤の『仙境異聞』（文政五（一八二二）年）がある。[11] 従って、天狗の存在は当時には一定のリアリティを保持していたのであり、粂次郎の消失のような事態を天狗や旋風と結びつけるのもそれほど不自然なことではなかったと考えられる。

また、柳田國男は、芝居に出てくる狂人が手に竹の枝を持つ様を、古代の託宣行為において笹の葉を手草に取り神の為に狂乱したことに由来するとし、狂乱とは本来神の領分であったという。[12] 中西進も『古事記』における御酒を「寿ぎ狂ほし」という言葉から、「狂」という状態が神懸かりとなる状態を指していたとしている。[13] 天狗や旋風と神の領分を〈超自然的領域〉として捉えるならば、〈狂気〉と超自然的領域の親和性を背景に、役人たちは乱心者の消失という事態に対し尤もらしい口実を作り責任を逃れたのだと言える。

為政者が対面を保つため犯人を〈狂気〉として責任回避に利用する。このような例として『後漢書』「郅惲伝」には、経書と讖記に基づき退位を勧めた郅惲に対し王が殺すことも放置することも出来ない結果「狂人」に仕立て面子を保った、という記述がある。[14]

本作では佯狂者が佯狂であると知られずに真の〈狂人〉であると受け取られ、その〈狂〉性を役人たちが利用して自分たちの責任を回避する、という構造である。従って、この『後漢書』にある為政者側が〈狂気〉でない者を〈狂気〉とする（＝佯狂）という事例とはやや趣が異なるが、為政者側が責任回避のために〈狂気〉を引き合いに出す、という点において共通している。〈狂〉であるから利用するという本作の事例、〈狂〉でないものを〈狂〉として利用する『後漢書』の事例、この二者のように、〈狂〉と〈佯狂〉は相反する概念のように見えて、表象のレベルで接近する、ということがある。この点については、後にまた論じる。

〈遊び〉としての佯狂

半七らは関係者に聞き込みを重ね、乱心者の出現の裏には工面のいい家の息子株連中の悪戯があると真相を見抜く。

「おれの当て推量はまあ斯うだ。おめえも知っているだろうが、この頃は世の中がだんだんに変って来て、道楽もひと通りのことじゃあ面白くねえと云う連中が殖えて来た。三、四年前の田舎源氏の一件[15]なんぞがいい手本だ。みんなひどい目に逢いながら、やっぱり懲りねえらしい。増村の息子をはじめ、その遊び仲間は工面のいい家の息子株だ。大抵の遊びはもう面白くねえ、なにか変った趣向はねえかと云ううちに、誰が云い出したか、たぶん増村の息子だろう、お城の玄関前で踊った奴には五十両やるとか、歌った奴には百両やるとか、冗談半分に云い出した

のが始まりで、おれがやるという剽軽者があらわれたらしい」

「遊び」「道楽」「変わった趣向」「洒落」「悪戯」「悪い洒落」、様々に言葉を変えて表現されるが、つまりは粂次郎の佯狂の裏にはこうした風流を気取った〈遊び〉が潜んでいたのである。

佯狂と遊びは密接に関わっている。『晋書』「阮籍伝」には名士・阮籍の次のような佯狂が伝えられている。

籍は容貌は壊傑、志気は宏放、傲然として独得。／酒を嗜み能く嘯き、善く琴を弾ず。其の意を得るに当りては、忽ち形骸を忘る。時人多く之を痴と謂ふも、惟だ族兄の文業のみ、毎に之に歎服し、以て己に勝れりと為す。[16]

八木はこうした阮籍の振る舞いを「自由奔放に振る舞い、礼教や世俗に反した奇行・狂態を以て真の人間らしさを追究した文人の姿」と説明している。[17] 日本においても自らを「狂生」と称し酒や歌を楽しんだ藤原万里の例が『懐風藻』に次のように見られる。

僕は聖代の狂生ぞ。直に風月を以ちて情と為し、魚鳥を翫と為す。名を貪り利を狥むることは、未だ冲襟に適はず。酒に対かひて当に歌ふべきことは、是宿願に諧ふ。[18]

中西はこの藤原の態度を「「遊び」への志向」としている。[19] 息子株連中の遊びから生じた粂次郎の狂態も、「真の人間らしさの追究」や「文人」としての姿ではないが、礼儀や常識にあえて反し自由に振る舞うことで「洒落」を追究し風流とするという佯狂の〈遊び〉の精神と結びついているのである。

〈風刺〉としての佯狂

かくして乱心者の出現は遊びから出た佯狂であった、という事件の真相が明らかになる。そして、半七はこの真相を江戸末期の頽廃の象徴として読み取る。

江戸末期の頽廃期には、こんな洒落をして喜ぶ者が往々ある。

「とかくに変った事をやって見たがる。江戸の人気がそんなふうになったのも、つまりは江戸のほろびる前兆かも知れません。」

田舎源氏の一件や粂次郎の事件のような洒落を気取った佯狂という悪ふざけは、江戸幕府の崩壊の予兆であるというのである。実際に、安政二（一八五五）年前後の江戸の状況といえば、まさに崩壊の危機に向かいつつあった。嘉永六（一八五三）年にはペリーが黒船を率いて浦賀沖に現れ、その威力に屈して幕府は翌年三月に日米和親条約を結んだ。続いて英・露・蘭とも類似の内容の条約を結び、鎖

国政策は破れ幕府は弱体化していた。後に安政の大獄、桜田門外の変等を経て倒幕運動が展開し幕府の滅亡へ到るのは公知の史実である。

佯狂には、社会風刺や政権批判という性質がある。中国において佯狂の元祖[20]とされる楚狂接輿は、『論語』「微子」で次のように語られている。

楚の狂接輿歌いて孔子を過ぐ。曰く、鳳や鳳や、何ぞ徳の衰えたる。往く者は諫む可からず、来る者は猶お追う可し。已みなん已みなん。今の政に従う者は殆し、と。孔子下りて、之と言わんと欲す。趨りて之を辟く。之と言うことを得ず。[21]

「狂人」を装いながら当時の政治を危険と諭す接輿に対して孔子は話をしようとしている。つまり、政権批判としての佯狂が『論語』内で価値づけられているのである。さらに、矢嶋によれば、時代を経て六朝時代に到ると、隠者として知られる陶淵明がその隠逸生活に入る際に楚狂接輿の歌を指針とすることで、以降接輿の処世やその歌の政権批判の象徴性はより明確にされるという。[22]

本作において、半七は江戸崩壊の前兆として粂次郎の「天下を渡せ」という言葉に着目し、その言葉は正に幕府が「天下を渡す前触れ」であったのかもしれない、と解釈して物語を締めくくる。

「今になって考えると、江戸三百年のあいだに、どんな悪戯をしても、どんな悪洒落をしても、江戸城の大玄関前へ行って天下を渡せと呶鳴ったものはない。全くこれが天下を渡す前触れだったのか知れませんね」

遊びの上での佯狂から出た戯言が実は時代の真実を突いていたということになる。このように、佯狂者が真理を語るという事例は『荘子』にみられる。『荘子』「逍遙遊篇」では先の楚狂接輿が言及され、彼が世俗の人間が「狂」とみなすような理解不能な話をするが、実はそれは超俗の境地を説いた寓話であるとされる。

肩吾、連叔に問いて曰わく、吾言を接輿に聞くに、大にして当たるなく往きて反らず、吾れ驚き怖る。其の言は猶お河漢のごとくにして極まりなし。大いに徑庭有りて人情に近からずと。／曰わく、藐き姑射の山に神人ありて居る、肌膚は冰雪のごとく淖約たること処子の若し。五穀を食らわず、風を吸い露を飲み、雲気に乗じ飛竜に御して、四海の外に游ぶ。其の神凝れば、物をして疵癘わざらしめ年穀をして熟せしむ。吾れ是を以て狂として信ぜずと。[23]

八木はこれを逆説と捉え、世俗の人が〈狂〉とするものにこそ荘子は真の価値を認めており、接輿の言葉に狂言から至言への反転を

看取している。[24] この接輿の風刺性・政権批判は意図的なものであり、本作での粂次郎の発言の批判性・予見性は意図しない結果ではあったが、狂言から至言への反転という性質は粂次郎の場合にも当てはまるであろう。「天下を渡せ」という発言は悪戯から発した刑罰を逃れるための狂言に過ぎなかったが、その後現実に幕府は天下を明治政府に引き渡し崩壊するのであるから、結果として狂言は真実の言葉となったのである。加えて、実際に幕府が頽廃し民衆に対する圧力が弱まっていたがゆえにこのような悪ふざけが流行したという因果関係を考慮に入れるならば、強ち偶然の繋がりでもないであろう。

また、粂次郎としては佯狂の振る舞いに過ぎなかったが、その言葉は東照宮の夢のお告げによるものとされていた。つまり自らの言を神意の発現としたわけである。先に、〈狂乱〉とは本来神の領分であり〈狂〉とは神懸かりとなる状態を指していた、と述べた。こうした論によれば、粂次郎の佯狂は、結果的には真の〈狂〉がそうであったように、神懸かりの託宣の如く未来を予見したということになるであろう。これまでにも触れてきたように、東照宮のお使と名乗るので粂次郎を手荒に扱えず、またその出現を天狗のせいにし逃亡を旋風のせいにするなど、物語の中で〈狂気〉と神の領域やそれに近い超自然的領域が親和性を持って語られていることはその伏線と捉えられる。このように、〈狂〉と〈佯狂〉が表象のレベルで接近していることがここでも確認できよう。

以上のように、本作は粂次郎の佯狂を軸に展開し、事件の内容、進行、真相、事件それ自体の位置づけというプロット進行の各局面において〈危機回避〉〈責任回避〉〈遊び〉〈風刺〉という佯狂表象の諸相を取り入れて活用しており、のみならず〈佯狂〉表象が〈狂気〉表象に重なり合う様をも見出すことができるのである。

近代日本社会において〈狂気〉の偽装は、刑法三九条「心神喪失者ノ行為ハ之ヲ罰セス」に該当するか否かという「乱心者」と同様の問題として存続している。しかし本作にみられる〈佯狂〉の諸側面は、罪を逃れる方便としての偽りの〈狂気〉かどうかという単なる精神医学的な判断だけに留まらない、〈表現〉としての可能性を豊かに纏っているように見える。本作「川越次郎兵衛」は、そうした可能性をプロットの随所に嵌め込み近代以前の〈佯狂〉の魅力を伝えているのではないだろうか。

※本論及びその中で言及した作品には今日では差別的と思われる語句や表現があるが、作品の時代的背景と価値とに鑑み、原文に倣った。

注

（1）初出と光文社版の大きな異同として、次の点が挙げられる。初出では、安政の大地震が史実に同じく「十月二日」とされているが、光文社文庫版では「十二月二日」となっている。浅子逸男編著『編集復刻版半七捕物帳　初出集成版』第六巻（三人社、

二〇一八年四月）に「同光社版までは正しい本文だったのが、早川書房版で「十二月二日」という誤植がおこり、青蛙房版、光文社文庫版に誤植がひきつがれた。筑摩書房版で改められた」との指摘がある。

(2) 土田健次郎訳注『論語集注』四、平凡社、二〇一五年二月

(3) 小島憲之校注『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』日本古典文学大系六九、岩波書店、一九六四年六月

(4) 八木章好「佯狂の系譜――中国古代思想における「狂」の諸相（二）」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』二〇〇七年三月

(5) 前掲『論語集注』

(6) 小竹武夫訳『漢書』中巻、筑摩書房、一九七八年一月

(7) 矢嶋美都子『佯狂――古代中国人の処世術』汲古書院、二〇一三年一〇月

(8) 内藤恥叟校訂『御定書百ヶ条』近藤活版所、一八八九年一二月

(9) 丸本由美子「江戸期日本の乱心者と清代中国の瘋病者（上）――その刑事責任に関する比較研究を中心として――」『北陸史学』二〇一二年一〇月

(10) 小田晋『日本の狂気誌』講談社学術文庫、一九九八年七月

(11) 小松和彦監修『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版、二〇一三年七月

(12) 柳田國男「巫女考」『郷土研究』一九一三年三月～一四年二月

(13) 中西進『狂の精神史』講談社文庫、一九八七年二月

(14) 吉川忠夫『後漢書』第四冊、岩波書店、二〇〇二年一一月

(15) 今内孜は前掲『半七捕物帳事典』で、この「田舎源氏の一件」が実際の出来事であると指摘している。今井金吾校訂『定本武江年表』（ちくま学芸文庫、二〇〇三年一〇月～二〇〇四年二月）には次のようにある。

嘉永四〔一八五一〕年

十一月十五日、鷲明神縁日、堀田原池田屋が催しにて、幇間及女芸者召連れ、舟にて浅草の鷲明神に詣で、夫より向島へ渡り大七にて支度す。道中すべて柳亭種彦作『田舎源氏』をまねびて装飾し、土手通りを大川橋の方へ練り行く。舟は橋の辺へ待たせ置きたるが、絹の幕を打ちたり。此辺、往来繁き処なれば、見物夥しきに乗じ総踊りを演ず。此の事官に聞へ、御咎にて二十三日北御番所にて手鎖になりたる者二十六人（内女九人）なり。

(16) 鷹橋明久「『晉書』阮籍傳訳註」『中国中世文学研究』一九九七年七月

(17) 八木前掲論文

(18) 前掲『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』

(19) 中西前掲書

(20) 矢嶋前掲書

(21) 前掲『論語集注』

（22）矢嶋前掲書
（23）金谷治訳注『荘子』第一冊、岩波文庫、一九七一年一〇月
（24）八木前掲論文

「夜叉神堂」小考

大石徳子

一．梗概

文化九（一八一二）年三月、渋谷の長安寺に京都清水寺から出開帳が行われ、造り物として五尺余りの大兜が出されることとなっていた。これに伴い、兜に付属している小判と二朱銀は取り除けろと寺社方からの命も下っていた。しかしこの兜は京都の職人の細工であるため、無闇に江戸の職人の手を加えるのは危険である。長安寺の世話役たちは加工法を相談の後解散したが、その一晩の間に奉納小屋の大兜から小判五枚と二朱銀五枚が紛失してしまっていた。寺社方は町方に通知、八丁堀同心の矢上十郎兵衛は御用聞き・兼松を呼び、金銀の探索を命じた。

兼松は子分の勘太を連れ、長谷寺へ向かう。不審な行動を取る二十五・六才の女を尾けるとその先は長谷寺の名物・夜叉神堂であり、さらに彼女は二朱銀を所持していた。鮨屋のおかみである彼女はおぎんといい、女郎あがりで亭主の腫物平癒のため参詣していたという。

堂の面箱の中には慶長小判も隠されていた。兼松らが見張りを続けると、手拭と鬼の面で変装した曲者が夜叉神堂の前に現れる。兼松と勘太が飛び掛かって変装を剥ぐと、近所の万隆寺の役僧・教重であった。女犯の破戒僧である彼は医者に変装しての品川通いにう

つつを抜かしており、金欲しさに悪事を働いたのだ。

詮議を行ったところ、教重は昨晩奉納小屋で金銀を盗み夜叉神堂の前まで来たが、変装に用いていた鬼の面が顔から取れなくなってしまったという。恐怖を感じて夜叉神に頭を下げ懺悔し、金銀を戻しに行こうと祈念すると面は外れた。懺悔の言葉の通り小判は夜叉神堂へ戻すも二朱銀は戻し損ねてしまい、心の乱れや罪悪感が強くすぐさま銀も元あった場所に戻そうと決心し忍び込んできたのである。

経緯を語る教重は悔悟の涙を流していた。さらに品川での馴染みであるおぎんと再会し、教重は赤面する。おぎんによれば、自身が品川勤めをしていた当時は教重の軽口に多くの女が騙されていたという。彼が真に盗品を返しに来たと知り、そのやり取りに憎めない思いになった兼松らは二朱銀の件を眼こぼしとした。

関係者に次第を話すと世間体もあり皆内密にする旨承知した。このため、長谷寺側は「金銀は夜叉神堂から発見されたが盗賊は行方知れずである」と公表する。この報せは噂や宣伝となり長谷寺の開帳はますます繁盛、教重は開帳六十日間を勤めた後末寺に送られた。

本作は半七ファンであった講談社社長野間清治からのアプローチにより、同社発行の『キング』昭和十一（一九三六）年臨時増刊号（十二巻十三号）に掲載された。同誌目次には「半七捕物　夜叉神堂（鴨下晁湖畫）」[1]と記述されており、本文掲載頁には「小判紛失事件、不可思議な女　捕へて見れば意外も意外！評判の半七捕物帖」[2]の煽り文句が付されている。初出から初版にかけて大きな異同は見られない。

執筆の経緯について綺堂は「七月十六日（木）午後二時頃に『キング』の掛川君が来て、何か寄稿してくれという。毎度断っているので、拠ろなく承諾。七月二十九日（水）きょうから『キング』の小説をかき始める」[3]と綴っている。

二．長谷寺と出開帳

作品の舞台となった長谷寺は曹洞宗大本山永平寺の東京別院で、慶長三（一五八八）年に大名山口家の邸内にあった観音像（大和と鎌倉の長谷寺と同木同作である）に堂を建てて、下野国の大中寺一二代の門庵を迎えて、同家の菩提寺としたのが始まりである。その後、山口家と長谷寺は一八年間争い離檀した。[4]夜叉神堂は現存しておらず、現在は大観音堂内に「大夜叉明王」として祀られている。また、井上馨、黒田清輝、榎本健一など著名人の墓が多いことでも知られる。

夜叉および面という要素を取り上げた綺堂作品として、代表作である「修禅寺物語」も挙げられるが、同作の「夜叉」について綺堂は「頼家が伊豆の修禅寺で討たれたという事実は、誰も知っていることですが、この脚本に現れたる事実は全部嘘です。第一に、主人公の夜叉王という人物からして作者が勝手に作り設けたのです」、「仮面（めん）の事は私もよく知りませんが、藤原時代から鎌倉時代に

かけて、十人の名人があって、世にこれを十作と唱えます。夜叉というのはその一人で、実は越前大野郡の住人ですが、夜叉という名が面白いのでちょっとここへ借用しました」と述べる[5]に留まっている。

夜叉はインド神話の鬼神であり、ヤクシャ（女性形はヤクシー）と呼ばれる。富の神クヴェーラの従者とされ、富の保持者、善良なものでもあるとされており[6]、物語内での公共財の窃盗、善悪の意識の行き来という事項はこれらのモチーフに立脚していると読むことができる。なお本作以前に「夜叉」を題にもつ作品として尾崎紅葉の『金色夜叉』が明治三十（一八九七）年から明治三五（一九〇二）年に連載され、泉鏡花の「夜叉が池」が大正二（一九一三）年に発表されているため、ここでも「富の保持者」のイメージを連想させる。夜叉の由来までは知らない読者であってもこれらの作品名から攻撃的なイメージと結び付けることは容易であろう。

作品内で開帳された「清水観音」は京都の音羽山清水寺の本尊である十一面千手観音を指す。『武江年表』文化九（一八一二）年の項にも、「三月三日より渋谷長谷寺にて、京清水寺観世音開帳（参詣人夥しく、山内諸商人仮や軒を列ねたり）」[7]と記載がある。

北村行遠は出開帳の歴史に関して「本来寺社が秘蔵する神仏を開扉して衆人に礼拝させ、神仏との結縁を目的とする宗教行事」とし、中世中期以降は「寺社の経済的基盤が一般的に弱体化していく過程で、開帳によってもたらされる参詣者の散銭・金品の奉納などの収益の、寺社財政上に占める比重が次第に増加」したと述べる。『看聞御記』から「応永二七（一四二〇）年四月二〇日条「醍醐一言観音今月自二八日一開帳、御堂破戒之間為二修理一開帳勧進云々」」の例を挙げ、「諸寺社は財政的側面や幕材を目的とした開帳を積極的に実施するようになっていった」と紹介する[8]。

出開帳で披露される造り物に関しては松岡薫が生活雑貨や陶磁器・野菜・草花を用いて制作する品々や御迎人形の例を紹介しており、「一般的な美的評価とは別の評価基準が存在し、非常に様々なコンテクストの上に成立している」、「それは制作する側だけでなく見物する側とも共有されるものであり、それを理解できぬ者にとっては評価も共有もできない」と特徴づけている[9]。一方で綺堂が作品内の造り物において金銀を用いたのは、『キング』における幅広い年齢層の読者が価値を理解しやすいからであろう。この銭を用いた造り物は寛延二（一七四九）年に不忍池弁財天に出品された「文銭で拵えた蛇」などの例もあり、高島幸次はこれを「銭としてではなく、銭を材料とした造形物」であるため、「裸の（お金の）まま」＝「ケの銭」ではなく「ハレの銭」として扱われるのだと分析している[10]。松岡はこの「蛇」以後も銭の造り物が消えることのなかった例として享和元（一八〇一）年の大阪天満宮における銭細工での「牛」や「渡唐天神」「花籠」などを挙げている。

本文中でも「本所深川や浅草の遠方からも随分お参りがあるようです」と人気の程が伺えること、そして「まじめな信心者だけでは、

どこのお開帳もうまく行かなかった」ために「参詣半分、見物半分で、みんなぞろぞろ押し掛け」させるために造り物が出されたこと、金銀があしらわれた兜を引っ込めたり事件の顛末が世間に知れたりすれば「残念」なだけでなく「人気にもさわる」という本音と建前の二面性が丁寧に説明されている。

三．破戒僧と品川遊郭

物語中の教重とおぎんは風俗業における客と従業者という構図である。教重は医者に化け品川通いを行っているが、これは女犯の罪に該当する。この罪に関しては住職以上の場合は死刑に次ぐ重罪である遠島の刑、寺を持たない僧であっても三日晒して本寺に引き渡すものとなっており、さらに相手の女が人妻の場合は獄門に処せられるものである。日本の仏教は追善供養・皇室及び為政者の国家統一達成・災害や病からの救済といった目的のために受容され、国家が宗団や清僧を育成、取り締まる状態であったが当時は寺院僧侶の腐敗堕落も蔓延しており、破戒僧・排仏論者は多く存在していた。作中時期に近い事例を列挙する。[11]

寛政九（一七九七）年九月
女犯の僧遠島の処、島無き故永極牢申し付く、相手方の尼は三十日押込む

享和三（一八〇三）年六月六日
谷中日蓮宗延命院住持日道（四〇才）、寺内で姦淫・懐妊・堕胎など破戒無慙の所行により死罪に処す

文政七（一八二四）年八月二十七日
武州堀之内妙法寺所化教是外五人、内藤新宿吉原其他にて遊興女犯肉食の咎により三日間晒す

おぎんが勤務していた品川も「品川の客ににんべんのあるとなし」と詠まれ、[12]旅人以外には侍、僧も多かったとされている。参勤交代の大名も百四十六家と多く、御殿山での花見や海晏寺での紅葉狩りなど、行楽地も豊富であった。そして品川宿には旅人の給仕や雑用の他売春もする「飯盛女」を置く旅籠屋が多かったが、幕府が吉原遊郭の遊女との差別化を図るため、宿の助成としてこの名で置くことを認めたのである。やがてその数が増えた為寛文五（一六六五）年には飯盛女は禁止となったがこの禁令は守られず、宝永五（一七〇八）年には当時禁止であった泊まりの規則を破ったとの趣旨で、吉原が飯盛女を訴えた。しかしこれも幕府は黙認したため、享保五（一七二〇）年、吉原は再び売女取締りを申し入れた。この後にも度々の法整備が行われたが効果は薄く、寛法二（一七四二）年五月十四日、二百十七人の女が逮捕され、六十三人の女たちが吉原に送られた。作中時期の文化九（一八一二）年を経た弘化元（一八四四）年にも

定員超の千三百四十八人の飯盛女がいるとして、多くの女たちを逮捕、品川宿は崩壊の危機を迎えたが、幕末には志士らの交通量が増え、ふたたび隆盛を取り戻した。[13]

風俗という事項に関し、国家は僧侶と品川女郎の双方を管理しきれておらず、教重もおぎんもその現状の象徴である。さらに読経鉦鼓を務める僧に関しても「道中の経費その他に多額の物入りを要するので、本寺の僧はその一部に過ぎず、他は近所の同派の寺々から臨時に雇い入れることになっている」と経済的な事情が語られている。しかし本文中には未だ厳格な権力を有する存在として寺社方が配置され、兜の処置や教重の処遇に際して物語に緊張感をもたらす。

作中においていまだ品川通いを続ける教重には処罰を受けるリスクが残っているが、「女郎あがり」となったおぎんは鮨屋のおかみとなったことで盛り場として不安定な品川から足を洗い、教重や他の客も過去の存在となっている。客と従業員というだけでなく、現在品川宿に関係があることを秘密にする必要があるか否かもまた二人の相違点となっている。

四．鬼の面

作中における教重のように、被った鬼の面が外れなくなる作品は多い。平田悦朗が列挙しており、[14]各話の梗概を紹介する。

①御伽草子「酒呑童子」

鬼の面を被り踊りを披露した童子が比叡山で禁じられていた酒を飲んで酔いつぶれる、面が外れなくなる。父にも縁を切られ、鬼神と化す。

②狂言「抜殻」

酒を飲んで出かけ、途中で寝入る太郎冠者。主人がこらしめに鬼の面をかぶせると目を覚ました太郎冠者は鬼に変じていた、主人にも追い返され、身を投げて死のうとすると鬼の面が外れる。主人に顔をみせ『これに鬼の抜け殻がござる』と言うのであった。

③御伽草子「磯崎」

磯崎何某の本妻が夫の新女房を憎み、旅の猿楽師に借りた面をかぶり打ち殺す。しかし鬼の面は顔から外れなくなり身も心も鬼となる。この面は子の勧めで座禅をすると外れた。

④民話「嫁威しの肉づきの面」

福井県吉崎御坊に伝わる。嫁は信心深く吉崎参りをしていたが、快く思わない姑が鬼面を被り夜道で脅すと外れなくなる。嫁が蓮如上人に姑を連れ念仏を唱えると面が外れた。

教重が発言した「嫁を嚇かしてさえも、面が離れない例」とはこの話であると推測される。

⑤ 講談「肉づきの面」

能面打ちの源五郎が、観世太夫に受けた屈辱に自害する。子の源之助は恨みを晴らすべく一心に般若面を打った。そして、観世太夫が引退時将軍御前の能舞台でつけた般若の面が外れなくなる。観世太夫が源之助にわびると面は外れた。

平田は鬼の面という道具に関して、「邪心を抱いた者が面をつけると外れなくなる」「やがて自分の身も心も鬼になっていく」、「周辺の人間に危害を加えようとするまでになる」等の特徴を見出している。しかし教重においては他の半七作品でみられるような怨嗟の念もなく、「総身に冷や汗が流れ」るほどの恐怖を感じ「懺悔滅罪」の念を起こしたことから「邪心を抱いた者が面をつけると外れなくなる」のみ合致し、他者への攻撃的な感情は介在しない。

加えて読み取れるのは医者に「変装」していた彼が手拭と鬼の面で変装した所皮肉にも外れなくなってしまったという側面である。「腹からの悪僧でもな」く「罪を人前にさらすことを恐れ」る性格の彼にとってこのような形で邪心を露呈するような事態は、恐怖や焦燥感に加え恥の意識を増長させる結果となる。教重が行った窃盗は品川通いを続けたいという日常的な欲望に根差したものであり、その秘密が露見する結末部もまた、他作品に見受けられる複雑な事情を持つ事件よりも読者の共感を呼び起こしやすい要素である。

五. 眼こぼしと結末

捕物役である兼松も教重と同じく派遣された身の岡っ引きであるが、綺堂は岡っ引きが持ち場以外に踏み出して働くことに関して同じく半七捕物帳の「雪達磨」文中で「岡っ引は原則として自分だけの縄張り内を守っているべきである。仲間の義理としても、他の縄張りをあらすのは遠慮しなければならない。しかし他の縄張りを絶対に荒らしてはならないというほどの窮屈な規則も約束もない」、「今日でも某区内の犯罪者が他区の警察の手にあげられる場合もある。まして江戸の時代に於いて、たがいに功名をあらそう此の種の職業者に対して、絶対にその職務執行範囲を制限するなどは所詮できることではない。半七がどこへ出しゃばっても、それは嘘でないと思って貰いたい」と書いている。[15]

兼松の詮議は矢上十郎兵衛からの正式なものであったが、綺堂の柔軟な思考は兼松がとった「眼こぼし」という選択に反映されていると考えられよう。「可哀そう」という思いから発せられた「そんなに弱い者いじめをするなよ」との兼重の言葉は噂話生成の発端となり、予想外にも長谷寺にとって好ましい宣伝効果を得る。同時期設定の半七作品として、異種姦淫の風評が殺人を招いた「小女郎狐」、隠密という身分やキリスト教信仰が発覚すれば即死罪へと繋がる緊張感を帯びた「旅絵師」と比較すると「弱い者」が救済されるという正反対の結末を迎えている。

物語を通して寺社方の圧力は強く存在し、教重の顔から鬼の面が

外れなかった原因も不明である。しかし、「夜叉神堂」では怪異譚としての側面よりも「悔悟の涙」に象徴される登場人物の心情描写が重視されている。物語随所に開帳・造り物・破戒僧・品川宿といった公権力に所属しつつもその目をかいくぐり私的な利益を追求する二面性を備えるモチーフが散りばめられる中、同様に女犯の僧という秘密と二面性を備えた教重が結末部において「まだ道楽をやめないで、とうとう大変な事を仕出来した」結果として羞恥を吐露することになった経過は、銭を用いた造り物同様万人に理解しやすいものである。

大衆小説誌『キング』は一九三〇年代には女性読者向け雑誌『主婦之友』、農村の人々から支持を得た『家の光』と共に百万部を超える三代雑誌として人気を博した。識字率の低い層も楽しめるようルビや挿絵が充実しており、元編集部員である斎藤修一郎によると創刊時に想定されていたのは「ピラミッドの一番最低からちょっと上がったところ」[16]という。

本作は捕物帳の名を冠しながらも普遍的な人情を解する岡っ引きや登場人物を配し、丁寧な解説や平易な設定で「眼こぼし」の許容される軽快な結末を迎えている。初掲載誌のニーズを強く意識した娯楽小品であるといえよう。

注

（1）『キング』一二（一三）臨時増刊号　大日本雄弁会講談社編　一九三六・一一

（2）（1）に同じ

（3）岡本経一『岡本綺堂日記』青蛙房　一九八七・一二

（4）俵元昭『東京史跡ガイド③　港区史跡散歩』学生社　一九九二・一一

（5）岡本綺堂「修禅寺物語―明治座五月興行―」『岡本綺堂随筆集』岩波書店　二〇〇七・一〇

（6）菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂出版　一九八五・三

（7）斎藤月岑編『武江年表』国書刊行会　一九一二

（8）北村行遠「江戸の信仰空間―出開帳寺社の開催場所の変遷をめぐって―」「立正大学文学部論叢」立正大学文学部一九九三・九

（9）松岡薫「ものから祭礼を読み解くために―造り物研究の成果から―」「現代民俗学研究（七）」現代民俗学会　二〇一五・三

（10）高島幸次「コミュニケーションを誘発する「造り物」―大阪天満宮の祝祭を中心に―」「懐徳堂研究（三）」懐徳堂研究センター　二〇一二・二

（11）疋田精俊「仏教における破戒僧の史的考察」「大正大學研究紀要」大正大学出版部一九七五・一一

（12）今内孜『半七捕物帳事典』国書刊行会二〇一〇・一

（13）中江克己「江戸の盛り場と娯楽⑧　江戸屈指の盛り場になった品川宿」「公評　五一（十）」二〇一四・一一　公評社

(14) 平田悦朗「鬼の面のこと」「国文（百）」お茶の水女子大学国語国文学会二〇〇四・二

(15) 岡本綺堂「雪達磨」『時代推理小説　半七捕物帳（三）』光文社時代小説文庫　一九八六・五

(16) 佐藤卓己『『キング』の時代』岩波書店　二〇〇二・九

「地蔵は踊る」小考

エンリコ・パオリーニ

一、基礎的情報

「地蔵は踊る」は『講談倶楽部』昭和十一（一九三六）年十一月号に掲載された、半七がかかわる三十二番目の事件である。[1] 概要は以下の通りである。

語り手の「私」が半七を訪れると、「縛られ地蔵」の話から半七はある事件を思い出す。

安政六（一八五九）年に起こった事件である。数年前高源寺という寺で、僧の夢枕に立った地蔵像が銀杏の木の根から掘り出され、一時は参詣人も増えるが、三、四年でまた元に戻る。しかし、コロリがはやりだすと、その地蔵像が踊り、その踊りを見る人はコロリに罹らないという噂が立ち、高源寺はまた繁盛するが、詐欺の疑いで寺社奉行所の調べを受けるようになる。だがその判断が下らないうちに、二日雨が降り続いた後、地蔵は動かなくなる。

十日後、地蔵堂の中に身元の知れない女の死体がみつかり、寺社奉行所の役人は女が絞められた後に地蔵像に縛られたと確認する。寺社奉行所の管轄ではあるものの、八丁堀同心の高見源四郎が事件を半七に任せる。子分の亀吉とともに高源寺に赴いた半七は、地蔵が地下道から動かされていたと推定するが、死体が消えたという報告に驚く。住職祥慶に聞くと、寺の僧は祥慶自身の他に役僧俊乗、

納所了哲、小坊主智心、そして十日前急にいなくなった寺男源右衛門の五人だけだという。神田に帰る途中、半七は源右衛門が地下道で死んだと推理し、亀吉に寺の五人についての聞き込みを命じる。

翌日の明け方に亀吉はがっかりした様子で帰り、寺の誰もが善人のようだと報告するが、一か月前に花屋の定吉の娘お住が田舎娘と歩いているところを見た人もいると言い出す。半七はまた高源寺に行くと、朝の大雨のため土が所々で崩れて無縁の墓から筋を引いているようだと気づく。半七はお住を墓地に呼び、推理をもとにきつく問いただすが、お住はただ俯いて答えない。半七はそれを自分の推理の裏付けとして受け取り、お住と定吉を逮捕しようとすると、智心が出て来て半七に襲い掛かる。亀吉の応援で助かった半七は住職祥慶のところに行く。

祥慶はすべて承知していたと白状し、長い説明を始める。夢枕の地蔵の計画を思いついたのは前の役僧の延光で、石屋松兵衛に像を造らせ、銀杏の木の下に埋めて掘り出した。ところが高源寺繁盛すると、松兵衛の息子松蔵が延光を強請り始めた。去年の二月延光が病気で死に、俊乗が役僧を継いだので、松蔵は俊乗に矛先を向けた。そこに現れたのが十年前に江戸を去ったお住の姉お歌で、松蔵から聞いた地蔵の秘密を使って定吉を強請り始めたが、俊乗を見た彼女は金ではなく寺への出入りを願い出た。俊乗は次第にお歌の誘惑に負けて堕落した。同時に松蔵は踊る地蔵の計画を立て、気の弱い祥慶と俊乗はやむなく同意する。松蔵は地蔵を動かす仕掛けの建設、源右衛門と了哲は地下道の掘削、源右衛門と智心は仕掛けの運転と役割が決まった。寺社奉行所の取り調べを恐れてやめようとしていた頃、俄かに二日間大雨が降った。晴れた翌朝地蔵を踊らせに行った源右衛門は地下道で生き埋めになり、寺の者が彼をを密かに葬り、地下道を埋めようとしているところを半七に見つけられた。

お歌を絞め殺したのは智心であった。俊乗を敬っていた智心はお歌を深く憎み、ある夜お歌を素手で絞め殺した。俊乗は智心を叱り、二人は死体を地蔵堂まで運び、地蔵像に縛って蘇生を祈る。明け方に俊乗が自分の部屋に戻った間に死体が通行人にみつけられたので、しかたなく奉行所に訴え出た。庫裏に置かれたお歌は昼になると本当に蘇り、祥慶はお歌を納得させて帰したが、いつか強請りに戻ると観念していた。祥慶の話が終わると、了哲が駆け込んで来て、俊乗が首を括って死んだと報告する。

半七老人は「私」に事件の結末を語る。お歌は一時消えたが、翌年つまらない強請であげられて、遠島になった。祥慶も遠島、他の者は追放になり、高源寺は廃寺になってしまった。松蔵は江戸から逃げたが、噂によると木更津で石地蔵を拵えるとき、地蔵像が倒れて頭を打たれて死んだ。

本論の目的は地蔵の役割と意味の追究である。題名も仄めかすように、お住に対しての尋問＝推理をする半七と亀吉以上に、地蔵は作中における存在感が大きい。超常現象が必ずしも否定されていないということは、本格推理小説と異なる捕物帳の一つの特徴である

と言えようが、「地蔵は踊る」の地蔵は始終超自然力を発揮しているようで、この作の主人公は地蔵であるとすら言えるのではないか。加えて、この地蔵は半七自身の比喩としても捕らえられるのではないかという点まで論じてゆきたい。

二、縛られ地蔵

小説の冒頭部分に、半七老人は「縛られ地蔵」のことを以下のように説明する。

> なにかの願掛けをするものは、その地蔵さまを縛って置いて、願が叶えば縄を解くというわけですから、繁昌する地蔵さまは百年じゅう縛られていなければなりません。（略）むやみに地蔵さまを縛ったりしては罰があたる。縛られる地蔵さまは『縛られ地蔵』に限っているのです。

この縛られ地蔵の存在は半七や捕物帳との関係だけではなく、日本探偵小説の源流と言える裁判小説、大岡政談との関係もある。南蔵院のホームページ[2]によると、縛られ地蔵の由来は大岡政談にさかのぼるという。「石地蔵吟味の事ならびに木綿取り返し裁判の事」という短編である[3]。内容を紹介したい。

白木綿を運んでいた荷担ぎの弥五郎が南蔵院の地蔵尊の隣で眠り込むが、目を覚ますと、木綿が盗まれたと気づく。弥五郎は店に帰るが、払えない弁償を要求されるので死ぬ覚悟をする。だが、友達の勧めで大岡に訴え出ようと町奉行所の前に三日間も動かず座り、やっと会えて事情を話す。大岡は地蔵が目の前の盗みを見て見ぬふりをしたか、盗人とぐるになったかのどちらかと判断し、その地蔵を縄で縛らせ、引き回しの上奉行所に運ばせる。話を聞いた人々が大勢見物に集まり、そのまま地蔵と一緒に奉行所に入ってしまうが、大岡が石地蔵を尋問する所を見ると、驚いて私語を交わす。それで大岡は無理に奉行所に入ったという罪で野次馬をすべて逮捕し、身元を調べた後いったん帰し、半月ほど経つと、科料として白木綿を要求する。牢に投じられるのではないかと恐れた野次馬はほっとして白木綿を奉行所に持って行く。積った白木綿を弥五郎に調べさせると、盗んだものが混じっていたとわかり、それを持ってきた人に売り主を聞くと盗人が判明し、盗まれた白木綿も科料として提出された白木綿も返される。石地蔵も南蔵院に戻されて、話は次の言葉でおわる。

> これより地蔵大いに名高くなり、何事にもあれ願を掛けるに験（しるし）あり。但し召し捕られし時縄目に逢いし故、願掛けの筋縄にて地蔵を縛り、願をかなえ給わば解きてまいらせんと願い事するよし。縛られ地蔵とて、本所中の郷に今もって在りけるとなん。

この由来話の史実としての信憑性は疑わしく、作者が既存の縛ら

れ地蔵に触発されて作った可能性の方がはるかに高いと思われるが、それでも大岡政談に収録されている以上、捕物帳にふさわしいモチーフであるに相違ない。一九二六年に初演された「権三と助十」という新歌舞伎の綺堂作の戯曲も示すように、綺堂は大岡政談に通じていたので、同じ縛られ地蔵がこの小説に登場することも偶然とは言えまい。

三、地蔵に帰せられる超常現象

「地蔵は踊る」の地蔵はコロリ除けとしての効果がなく、高源寺の僧侶の詐欺に過ぎないことが明らかになるものの、話の展開の中では自然力で説明しがたいいろいろな出来事が起こる。その主なものはお歌の蘇生と松蔵の死であるが、俊乗の自殺と源右衛門の死も納得しがたいところがある。

まずお歌の蘇生から見ていく。寺社奉行所の役人が死体の検視を行ったのに、なぜまだ生きているとは気づかなかったのか。江戸時代の検視は、もちろん現代の検死などとは比べ物にならないが、「現在の法医学に相当する『無冤録述』という書」があり、検視での心がまえや注意点も、死因とその死体に現れた特徴も詳記されているこのテキストによって行われた[4]。科学的正確さに欠けているとはいえ、少なくとも周囲が死を認めるような、もっともらしい手続きを踏んでいたことは確かである。周囲が死を認めた以上、物語世界ではお歌が本当に死んだと考えるのが妥当であろう。もちろん実際の事件なら役人の不注意であったと説明した方が遥に納得しやすいが、捕物帳は必ずしも今日の科学や常識ではなく、江戸時代の事実認定や思考に基づく虚構である。だとすれば、お歌の蘇生は神秘現象に他ならないと言えよう。地蔵が俊乗の祈願を叶え、お歌を生き返らせた可能性は否定できないと思われる。

それに対して、俊乗の死は自殺なので地蔵などに帰することは納得しがたいであろうが、特別な変死ではある。俊乗が首を括ったと了哲が駆け込んできたすぐ後、語り手は「縊られたお歌は生きて、さらに俊乗が縊れたのであった」とコメントを加える。つまり、地蔵が絞め殺されたお歌を助けたので、お歌の代わりに同じような方法で死ぬ者が必要になり、その役割がお歌の恋人俊乗に回った、と綺堂は暗示しているように見える。そのような視点から見れば、俊乗の自殺を罰ではなく、劇的効果を狙う悲惨な「褒美」としても捉えられるのではないか。この変死が特別なものであることは、内容的には第六章の悪人たちに科された罰のリストを思わせるものの、第五章に収められていることからもわかるであろう。自分にとってはよからぬ敵のはずのお歌の蘇生を地蔵尊に祈る、五人の僧の中で一番有徳である俊乗は、自分の祈願が叶えられるだけでなく、他人に頼らず自分の手で自分を処罰するチャンスを与えられる。罰を受けるべきことは変わりがないが、面目を保つ死に方とも考えられるのではないか。

また松蔵の死も考察する価値がある。地蔵を作った父の秘密を知

り、それを種に強請りを働いた松蔵が石地蔵に頭を打たれて死ぬとは、半七老人が言うように「因縁話のようで」ある。理性的な説明を求めると、ただ偶然の一致であるとか、半七が直接見た出来事ではないので作り話である可能性が高いとか、可能な理屈は簡単にいろいろと出てくるが、捕物帳としてはやはり因縁話説の方が納得しやすいのではないか。

以上のような神秘的な出来事を除いても、因縁や超自然力の存在が小説の所々にみつけられる。住職祥慶は二回も「仏罰」という言葉を使う。一回目は縛られ地蔵の計画を思いついた延光の病気について話す時で、二回目は松蔵の出現である。もちろんこれは住職のセリフなので、本当に超常現象だと仄めかされてはおらず、ただ修辞的な表現であると言えようが、話の神秘的な雰囲気を深めているであろう。

最後に、源右衛門の場合は罰が雨を通じて与えられている。二日間大雨が降り続き、晴れた後源右衛門がまた地下道に入ろうとすると、雨で崩れかかっている横穴は落ち込み、源右衛門を生き埋めにする。また、半七が事件を調べ始める翌朝にまた大雨が降り、地下道はまた崩れ、今度は被害者こそ出ないが、崩壊で詐欺がばれてしまい半七がすべてを明らかにするようになる。これは雨という自然力を通じて、神仏が悪人を責めているように見える。その目的は源右衛門自身を罰することよりも、踊る地蔵という冒涜行為を止めようとすることである。

突き詰めると、以上の出来事が超常現象であるかどうかはっきりとは断言できない。捕物帳によくあることで、神仏や妖怪の仕業とも思われる神秘的な出来事が起こると、理性的な説明で解決されているものの、超常現象の可能性は決定的に否定されてはおらず、最終判断は読者に任せてある。

「地蔵は踊る」の冒頭部分に、半七老人は以下のように言う。

いつの代でもそうかも知れませんが、昔は神仏に流行り廃りがありまして、はやり神はたいへんに繁昌するが、やがて廃れる。そこで、流行らず廃らずが本当の神仏だなぞと云ったものです「…」

林泉寺の縛られ地蔵が本当の神仏だけあって、今まで廃れず残るのに対して、高源寺の縛られ地蔵は偽物で、一時流行った後やはり廃れ、高源寺自体が廃寺になってしまった。以上のように高源寺を廃寺にした出来事を地蔵尊の仕業として解釈すると、この半七老人の説明にもう一層加えられる。「はやり神はたいへんに繁昌するが、やがて廃れる」ことは偶然ではなく、人々の知恵や賢明さによるものでもなく、神仏の干渉のおかげである。林泉寺の縛られ地蔵を保ち続けたのも、高源寺の縛られ地蔵を荒廃させたのも、個々の寺を超えて存在する地蔵尊自身であった、とこの小説は仄めかしているのではないかと思われる。

じて、江戸末期の頃には地蔵さまのお顔もはっきりとは拝めないくらいに磨滅していました。

高源寺はその後、廃寺になってしまって、今では跡方もなくなりましたが、一方の林泉寺の縛られ地蔵は昔のままに残っています。明治以後は堂を取り払って、雨曝しのようになっていますが、相変わらずお花やお線香は絶えないようです。

この文章は表面的に地蔵だけの話ではなく、仏教そのものの興亡の比喩にも見えるだろう。江戸時代の人々にとってお寺や仏教の儀式などは生活の不可避な一部であり、半七自身が「私」に説明するように、踊る地蔵のような怪しい迷信を信仰するようになった者も少なくはなかったが、明治時代の「私」のような人は「地蔵が踊るといえば…すぐ笑う」のである。この展開は地蔵の状態に代表されている。始めにはっきりと見えていた地蔵の顔（＝正統派的信仰）は長年の磨滅（＝堕落にも見えるが、長年続いた信仰の証拠）で見えなくなった。明治時代に入ると堂が取り払われ、地蔵が雨曝しになる（＝西洋的思想の輸入で日本は文明開化を推し進め、国家神道を採用した結果、仏教が一時廃れてしまう）が、まだ花や線香を持って来る者がいる。

さらに言えば、地蔵は半七の比喩としても見える。半七自身は「私」と話している途中、自分と地蔵を比較する。半七老人がある事件を思い出した気配を示すと、「私」はすぐ手帳を取り出し、半七は目を

四、地蔵の象徴的意味

ここまでは地蔵の「登場人物」としての役割を論じてきたが、この四章では地蔵の比喩的な意味を明らかにしたい。地蔵はこの小説の主人公であると思われるだけあって、話の中心（江戸時代に起こった事件）だけでなく、外枠（半七老人と「私」の時代）にも登場し、話は地蔵で始まり、地蔵で終わる。半七が事件を「私」に語るきっかけになったのは高井几董の縛られ地蔵を歌う俳句で、林泉寺の縛られ地蔵がまだ廃れず残っているという文章で話はまとまる。このように、超自然力を発揮している主人公としての他に、地蔵は小説の対称的な構造にも重要且示唆的な位置を占めている。しかし、また興味深い比喩としても解釈できるのではないかと思われる。

話の冒頭と末尾に、半七老人は以下のような説明をする。

縛られ地蔵は諸国にあるようですが、江戸にも二、三カ所ありました。中でも、世間に知られていたのは小石川茗荷谷の林泉寺で、林泉寺、深光寺、良念寺、徳雲寺と四軒の寺々門をならべて小高い丘の上にありましたが、その林泉寺の門の外に地蔵堂がある。それを茗荷谷の縛られ地蔵といって、江戸時代には随分信仰する者がありました。地蔵さまの尊像は高さ三尺ばかりで、三間四方ぐらいのお堂のなかに納まっていましたから、雨かぜに晒されるようなことは無かったのですが、荒縄で年中ぐいぐいと引っくくられるせいでしょう、石像も自然に摺れ損

開いて以下のセリフを述べる。

あなたも気が早い。もう閻魔帳を取り出しましたな。あなたに出逢うと、こっちが縛られ地蔵になってしまいそうで。あははは。

もちろんこれはただ半七が「私」の好奇心を満足させることを表現する冗談であるが、よく見るといろいろな共通点がみつけられるのではないか。半七老人も、縛られ地蔵のように、長年の磨滅（＝岡っ引きとしてよく使われて尊敬されてきたこと）で廃れかかっている昔風の存在で、明治維新で堂（＝役職）を取り払われたのであるが、「お花やお線香は絶えない」（＝好奇心に駆られた「私」はよく半七を訪れて昔話を要求することで、半七という地蔵を縛る）。地蔵は縛られることが迷惑で不便なことなので縄を解きたいながら、衆生を救済するという志を抱く菩薩として縛られたいのでもあるように、半七が昔話を語るのは「私」が閻魔帳をしまうためでありながら、語りたいのでもある。また、「流行らず廃らずが本当の神仏」なら、半七の方がどうなのか。一方では確かに明治維新で役所がなくなって引退したが、他方ではまだ生きていて満足のいく生活を送っているようであるので、半七の元同僚や子分の中にたぶんいるであろう明治維新で完全に廃れた「偽神仏」に対して、半七は「本当の神仏」と言えるのではないか。

五、まとめ

本論では、「地蔵は踊る」の縛られ地蔵はただの石像ではなく、重要な登場人物であり、主人公とまで言えるのではないかという読みを提起した。小説の展開は半七らの努力よりも、地蔵が度々超自然力を発揮することで齎されたような出来事のおかげであるし、話の構造という点から見ても地蔵は象徴的な存在である。小説の外枠でも要でもあり、半七自身との比喩的な存在であるとも言えよう。また、縛られ地蔵と大岡政談との関係は非常に示唆的で、大岡裁きに興味を抱いた綺堂がその意味ありげな縛られ地蔵を捕物帳の「主人公」にしようと決めたのも偶然とは言えず、綺堂の造詣の深さを反映しているのではないかと思われる。

注

（1）今内孜『半七捕物帳事典』（国書刊行会、二〇一〇年一月）三九四頁

（2）業平山 南蔵院の公式ホームページ〈http://shibararejizo.or.jp/shibararejizo.htm〉（二〇一八年一〇月一五日閲覧）

（3）辻達也（編）『大岡政談2』（平凡社、一九八四年一二月）

（4）山本博文監修『江戸「捕物帳」の世界』（祥伝社、二〇一五年一二月）八二頁